　　　　通信第七十二号　　報恩講

　二十七日から二十九日にかけて長仁寺報恩講がつとまります。その準備の日々です。コロナのために三年間はお泊りがありませんでしたが、今年は新潟から渡辺義彦さん、岐阜から田中秀法さん、森はる美さんが泊まり込みでご来寺くださいます。自然に気が引き締まります。

　これに先立ち、十三日総代役員世話人会議がありました。本山からの一戸あたりの宗費や一年間の活動報告や会計報告、営繕のシロアリ対策等協議されました。私は住職をいていますので肩の荷が降り、気持ちが楽になったと思いながらの席に座っていましたところ、最後に前住職挨拶の指名がありました。私は次のように挨拶をさせて頂きました。

　このたびの地震被害を受けた、石川県、富山県地方は真宗の盛んな所です。知り合いの野崎さんとようやく電話がつながりました。「家は半壊しました。井戸があり、その点は助かっています」と、「無事でよかったです。蓮如上人の聞き書きの中で、寺が壊され、さすがの蓮如上人も意気消沈して行方をくらましたそうです。ようやく探し当てたお弟子のさんは『よかった、あなたがおられればご信心の力でまた建物はたてられる』。そしてその通りになったとのことです。お念仏しながら慌てずに一つ一つ復興してください」。「はい、みんなと協力して復興します」とのご返事が返ってきました。

「今晩の会議で話し合われたことの一切はご信心をいただくため、信心を後世に残していくためです。」と申し上げました。皆さん引き締まった感じがしました。恩徳讃の歌声が力強く響いてきました。私自身ご信心の道を一筋に貫いていくように如来さまから励まされたように感じました。

報恩講をお迎えすることに際して、改めて神妙な気持ちにさせられています。ここに『知恩』（円照寺・暁青発行）という冊子があります。その中に先生のご文章があります。

　昭和二十一年の報恩講も近づいて来た。私は知友同行と共にこの報恩講を迎うるのに胸をらしておる。報恩講に際して聖人にぐる最上のお供え物は、聖人のお客人を迎うる事である。私は聖人のお客人として私の営む報恩講のに一人でもたくさんの知友同行の集まらるる事を望んでいるのである。聖人の最も喜ばせられるお客人として皆さんをご招待する光栄を感ずるのである。・・・・・・・・・

　　聖人は「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も　骨をくだきても謝すべし」と記されてあります。如来さまから、**このいのちよりも、もっと大事なもの（他力回向のご信心）**を頂いておるのであるというお喜びのあふれであります。今日の私どもが報恩講をつとめさせて頂くことは、聖人のこの如来知識にたいする感謝のお言葉を私どものものとして聖人にたいしてお礼申すのでございます。この「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし」という聖人のお言葉を、私どもは毎日毎夜のお礼の心として新しい年を迎えたいと思うのであります。

暁烏先生のご信心の躍動が響いてくるご文章です。この報恩の心がはたらいているからこそ今

年七百六十三回忌の御正忌報恩講がつとめられるのであります。真宗教団は報恩講を中心とし

た教団です。ところが七百五十年もたつと、形式化、習慣化されてその本質が見失われてしま

います。私自身がその中に在ることが照らされます。若い頃、何のために報恩講がなされてい

るのかがぼやけていた時は準備でくたびれ、人間関係に疲れて親鸞さまのご影像の前で手をつ

かされ、申し訳なさに涙が出たことがありました。この度の準備等は現住職、坊守がにして

くれたお陰で改めて本来のあり方が問われました。

先日、黒澤明監督の「生きる」という映画をテレビで視聴しました。お役所の課長さんが形式

仕事の日々の中、余命六カ月の癌になったのです。昔はがん告知は本人に知らせませんでした。

ところが主人公の渡辺さんは知ってしまったのです。三十年間欠勤もせず、遊びもせずひたす

ら真面目に働き続けたことが意味をなさなくなりました。貯金を下ろして遊びに行くのです。

遊び方が分からず、酒場で知り合った人に教えてもらって、キャバレー、パチンコ、ストリッ

プ、若い女性と喫茶店に行く日々でした。しかし、心のむなしさは晴れるどころか増々むなし

くなっていくのです。そのうち、若い女性から「やせて気持ち悪い」といわれます。「わしはも

うすぐ死ぬ、何をしていいのかわからない。たのむから教えてくれ・・・・・。」しばらく沈黙

のあと、女性が仕事で作っていたおもちゃを握りしめて帰りました。次の日から役所にもどり、

陳情に来て後回しにしていた仕事がありました。雨が降るとぬかるんでいた土地を公園にする

仕事です。それから人が変わったように役所の壁を越え、妨害の圧力を越えて、仕事に取りく

んで行きました。そして公園は出来上がりました。

渡辺さんは死んで、渡辺さんの遺影写真の前でのお通夜の席です。上司は自分たちがあの仕事

をやったように自慢します。同僚は「なんであんなに地味な人があのような立派な仕事が出来たのだろう。もしかしたら、渡辺さんは癌を知っていたのではないか。そういえば・・・・・」それぞれ思い当たるところがありました。

最後に警察官が焼香にきます。「お詫びします。昨夜十一時ころ雪の中、公園のブランコに老

人が乗ってゆっくりとゆれていました。注意しようと近づきましたが、何とも言えない美しいメロディーで『し恋せよ　赤きくちびるあせぬまに　熱きの冷えぬ間に　明日の月日は　ないものを』（ゴンドラの唄）が聞こえました。そのときのお顔が赤ちゃんのように嬉しそうに、満足しきっておられたので、そのままそっと帰りました。あの時連れて帰ったらよかったのですが」父親が浮気をしていたと思っていた息子夫婦や同僚たちは皆沈黙です。

先生は「宗祖聖人をう」の中で

　　親鸞聖人はなすべきだけをなしたという満足をもって終わられておるのであります。死なれたというよりは生き尽くされたというべきであります。・・・・・本土に帰るというであったのであります。それは帰るべき時が来たから帰るのであって、帰るのは再び来たるべきことであったのであります。それはひとえに如来本願の廻向であって、往相の廻向も如来のたまものであり、還相の廻向も如来のたまものであります。それゆえその身のを喜んでひとえに仏恩の深きことをいよいよ喜ばれたのであります。

と述べておられます。大石先生の死のお顔、お身体に接した時の私の受けた印象と同じであり

ます。そういう生き方、死に方が第十八願の信心から恵まれるのです。人間からは決してでき

る事ではありません。

私は映画に引き込まれて、途中から涙が止まりませんでした。私と何か生き方が重なっていたからです。生死を超えた道があり、よき師、よき友にえことのご恩を感ぜずにはいられませんでした。余韻が後々まで残りました。

愛知県刈谷市の水本健太郎同行さんが医師から法座に行くことを止められた際に「あんたはあんたの医道という道があるやろ。わしは仏道という道がある。だから聞法に行って死んでもかまわんのや」。それを聞かれた医師は止められなかったそうです。法座に車いすで来られ、立ち上がった時の健太郎さんの崇高なお姿、ご尊顔は終生忘れられません。刈谷本願道場には健太郎さんの願いが生きています。

　今年の報恩講に岐阜から来られる田中秀法さんも足はよろよろです。世間の医師の診断は認知症です。常識からはとても九州まで来れるはずがないのです。しかし、娘のはる美さんの付き添いもあって、刈谷本願道場、三重本願道場、高岡本願道場にご参詣されています。不思議にも仏法の会話はまったく問題ありません。いつ死んでも後悔のないご姿勢があります。だからそのままに認知症に臆することなく、明るく生かされていることが証明されています。

　映画の話に戻ります。最後のシーンで日常生活にもどります。お通夜の酒の席で、「渡辺さんのように立派な使命感をもって仕事にとりくむぞ」。と意気込んだのはその場限りで、また業に負けて同じことをくり返しています。人間の愚かさがしみじみと伝わってきました。のことではありません。第十八願の信心の世界が開かれないと新生活は展開されません。大石先生はそこを生涯貫いて見せて下さいました。親鸞さまのみ教えに

その廻心とは、日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、**日ごろの心にては、往生かなうべからず**とおもいて、もとのこころをひきかえて、**本願をたのみまいらする**をこそ、廻心とは申しそうらえ。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　歎異抄第十六章

報恩講は日ごろのこころから、本願の世界へと一歩引き出される勝縁です。そこをしては無始

よりの迷いから抜け出る御縁はありません。

　の苦をすてて

　　無上涅槃をすること

　　如来二種のの

　　恩徳まことに謝しがたし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

　の苦をすてて

　　をすること

　　釈迦のちからなり

　　に慈恩を報ずべし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　善導大師和讃

親鸞さまも釈尊も蓮如上人、先生方は娑婆永劫の苦から解放された救いを説いて下さっています。

先日、函館市の永田さんから本の注文を頂きました。ユーチューブを見られ、ホームページか

ら本が出ている事を知られたそうです。お礼の電話でまたお互いに驚いたことがありました。永

田さんは三十年まえに出版された『師との出遇いを確かめる』という冊子を読まれていたのです。

その時の私の名前は忍です。髪も長髪でした。「まさか同一人物だとは思っていませんでした」

と。「私は別人のように成らされました」と申し上げました。大石先生に遇い、お育てを受け、願

いに生きる心が発起されたからです。自分でもわかります。自分のユーチューブを見ていて、こ

れは私かなと思わされることがよくあります。もうひとつ正確にいうと、全く変わった面と全く

変わらない面とがあります。

　変わった面とは「浄土論註」にのおたとえがあります。地中で百年間、枝や葉をつけて、

地上に出るや一日に高さ百丈生長するという心境の変化です。世間でも「三日会わざればし

て見よ」と言われるそうです。「努力をしている人は三日もすれば大きく成長しているので、次

に会うときは注意してみなければならない。」とのことです。私は努力していません。しかし、法

蔵菩薩さまが私の中でご修行してくださっていることは信じられるのです。こちらからの自力の

生活では考えられません。不連続です。ところが如より来生せる廻向のおはたらきは一貫して連

続しています。一筋に生長させられるのです。生活、人間性に現れてくるのです。

　全く変わらない面は私の縁に触れて起こる悲しく、愚かな煩悩です。浅ましい身の迷いの真実

です。ここはどうなっているのか。親鸞さまは、後世の求道者がこういうところで壁にぶち当た

り、行き詰まると見越しておられたのでしょうか。信の巻の中に次のようにお書きになっておら

れます。

　　誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利のに迷惑して、のに入ることを喜ばず、真証の証に近づくことをまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典二五一

『教行信証』は親鸞さまが浄土真宗の教えをにして、後世に残しておくために心血を注がれたご書物です。その中に、このようなご自身の痛切な告白を書いておられるのは私利私欲や名誉を捨てておられるからでありましょう。そして後の私たちが本当に救われるために、すべてをさらけだされて間違いなく「あなたはあなたのままで、本当に救われるのですよ」と呼びかけてくださったからこそ、今でも機が熟した時、親鸞さまの教えが生きて聞こえてくるのではないでしょうか。ここまで正直に書き残された人は日本でも、世界のでもあまり見られないことです。

私などはここまで書いていただかないと、自分で自分をごまかしたり、あきらめて前へ進んでゆ

けません。彼の願力に帰依させられ、歩み続けることは不可能です。大石先生、藤解先生や数々

の先生方、そして名も知れぬ同行様方が本当に親鸞さまに従ってゆかれたお陰で私も親鸞さまに

従い導かれてゆかされます。

　一月二十三日付けの毎日新聞の社説に経済中心の価値から、社会とのつながりや生活の満足感

や幸福度を重視する社会の転換を呼びかける文章が掲載されました。真宗の信仰の盛んな地域に

幸福度が高いことは前から知られています。必然に、報恩の感情も強いのです。梅干と思っただ

けで口の中につばがにじむように、報恩講と思うだけで、温かく、楽しく、わくわくするという

報恩講が長く続いてきました。ところが、戦後社会情勢が変わり、あらゆる面が重なって報恩講

も前の熱気が薄らいでいます。しかし、心の世界はいくら世の中が変わろうと人間あらん限りご

縁次第で氷の心が水のように変ったり、熱い湯の心に変わらされます。

　このたび、おや花立、、掃除、仏具みがきなど当番地域の皆様と作業しながら温泉の湯につかったような楽しいひと時を過ごさせて頂きました。こういう時代だからこそ、何かお互いに大切なものに帰りたいという心がはたらいているように感じられました。こういうご縁の場があってよかったな。と静かな喜びが沸いてきました。親鸞様、如来さまからのご功徳であります。

　二十五日午前三時ころ、お知らせがありました。「永遠に自分の思いが無くなるのは恐い淋しい、ではなかった。我執から出る思いは迷いであり本来何もなかった。あるのはご本願。本願から生まれ、本願に生かされ、本願に帰らされる。」思わずメモに書きとめました。私が六才の時、祖母のスガばあちゃんが亡くなりました。それから何日間か木を見ても、「この木が大きくなったら僕はこの世にいない」。赤ちゃんを見ても「この赤ちゃんが年を取ったら僕はこの世にいない」。と思うと淋しく、悲しくなりました。で「こう思っている思いがずっとなくなってしまう」と思った途端に大声を出して泣いたのを不思議に憶えています。六十二年たって深く眠っていた問いがようやくけました。

「ご本願（光）から生まれ、ご本願（光）に生かされ、ご本願（光）に帰らされる」。なんと有難いことか。親鸞さまのみ教えのお陰であります。

令和六年一月末日

常照　拝